白老町活性化推進会議　第３回　教育専門部会（報告書）	
開催日時	平成２６年　６月１３日（金）15：30～16：45
開催場所	白老コミセン 202 号室
出 席 者	岡田育子（アイヌ協会）、八幡巴絵（アイヌ民族博物館）、山田和子（ロータリークラブ）、勝洋一（校長会）、高木藤子（町内会連合）、竹下和男（文連協）、押野里架（チキサニ）、高尾利弘（教委課長）、平野敦史（教委学芸員） ＊敬称略
会議概要	**議事①** 〇白老イオル事務所チキサニ（以下、「チキサニ」）の照会および取り組んでいる文化学習を説明。 ・白老を先行に平成 18 年度より開始された、イオル再生の拠点施設として平成 20 年度にオープン。アイヌ文化振興研修推進機構（以下「機構」）が実施する事業の一辺である、「伝統的生活空間の再生」を担う。 ・空間（イオル）を山、川、海に分類し、季節ごとに野外学習や地引網漁などを体験していく事業。また事業ごとに例年参加している学校に傾向がある（例：川のイオル事業では萩野小学校と緑丘小学校。銛による漁と解体、利用部位の説明やアイヌ語の紹介を児童の前で行う）。また学校出前講座では小中学校における道徳の時間などを利用し、教員と協議しながら授業内容を構成している。 ・苫小牧や室蘭などの町外の小中学校においても体験およびアイヌ文化紹介の講座を実施。アイヌ民族博物館（以下、「博物館」）からの紹介（博物館では町外からの要望に対して経費を請求する規定があるため）。小学校では歌や踊りが中心。中学校では、教員から世界観や歴史の話の要望もある。 ・教職員研修では 7 月末の 3 日間、大学教授などを講師に招いた講話や芸能・調理体験を実施している。食文化体験の人気が特に高く、古老から聞く体験談も好評。一方で歴史の話は伸び悩む傾向にあり、教材化された内容を求める声もある。 ・博物館で平成 21 年から行っている担い手育成事業は、機構の事業の受け入れ。全道各地の伝承者から技術や知識を教わるほか、授業・体験のプログラム構築などを担う。 **質疑**　参加人数の傾向は？ ⇒6 名～10 名。地引網は 100 名を超す。通常の体験も広報で周知するが、地引網ではチラシの配布や口利きの効果も加わる。 **議事②** 〇仙台藩白老元陣屋資料館の取り組みについて説明。 ・伝統的なアイヌ文化の発信については、資料館の運営理念の状況もあ

	り、多くは実施していない。 ・近世期の展示会を行うなかで、アイヌ民族の情報が加わることはある。それでも年間に1回～2回ほどの頻度。 ・郷土史としての発信が殆ど。個人名でアイヌ民族の姿は表れても、主眼は時代ごとの白老の様子の発信にある。 ・財団との連携の必要性は感じている。特徴的な博物館を有する町として、協力しながら発信力を強めていきたい意向はある。 **質疑**　サークル活動などは行っているか？ ⇒郷土情報を扱う中でアイヌ文化が題材となることはある。頻度としては多くない。平成21年度には観光協会と連携し、アイヌ語地名マップを作成し、配布した。 **議事③** 〇イランカラプテキャンペーンにかかる情報部会との連携について。 ・情報部会の素案が固まってから協議。象徴空間にかかる具体的な方向性が示されてからの話になる。6月13日に閣議決定される。 **議事④** 〇その他 **議論　①象徴空間と部会との関連性は？** ⇒象徴空間の整備は国の事業として行われるが、周辺の環境整備には、町が深く関与していくことになる。 イオル事業も継続される見通し。そのなかで予算組も考えなければならない。 従来との大きな違いは、文化振興から文化復興へと基幹的目的の文言に変化があったこと。 この状態を踏まえた枠組みを、国は平成27年3月頃に固める見込み。 **②部会で目指す終着点は？** ⇒制限はない。誰を対象に、どのくらいの深度で、どれくらいの予算を使って、いつまで実施するのかも含めて、ある意味では自由度の高い議論が求められている。 教員には異動があるので、教育行政の執行方針などに、通念的な見通しや目標を組み込み、カリキュラム化されたものがあると行動の根拠や方向性を持ちやすい。カリキュラムは作成中。 **③歴史学習の重要性は？** ⇒アイヌ民族に対する理解の浸透には不可欠。チキサニや博物館の事業では必ず冒頭に組み込んでいる。教職員研修における教師の反応は様々。 困難な課題であるだけに、講話側と受講側の双方に努力が求められている。

	④普及の方策については？ ⇒教職員研修は一般の参加も可能。教職員研修が事業化しているのは、学校の授業への組み込みを念頭に置いてのこと。 取り組みの程度は、教員個人の関心の濃淡に拠るところも大きい。 千歳市末広小学校が行っている復元チセを活用した授業は参考になるところが大きい。 古老の話は一般の参加者への理解促進にも有効と見込める。 勉強中の若手も含め、多分野に及ぶ聴講の場を設けることで理解の促進につながるし、アイヌ民族に関わる人々の多さや課題の多様性にも気づくことができる。 象徴空間の完成までが長期に渡ることを踏まえ、まずは身近な町民への発信から取り組むのはどうか？町内各団体の年間事業や研修を利用する（博物館やチキサニの事業に参加してもらう）のも効果的と思われる。 **⑤次回の部会について** ⇒7 月 28 日（月）の教職員研修として予定されている講話「エカシ フチの語り部」に参加しよう。
次回開催予定	**7 月 28 日（月）で確定**